
Nobody do see girl

スラフィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Nobody do see girl

【コード】

N1710K

【作者名】

スラフィア

【あらすじ】

その女の子には、名前がありませんでした。
その女の子には、友達はいませんでした。
その女の子は、いつも、ひとりぼっちでした。

ある森の小屋に、女の子がひとり、住んでいました。

その女の子には名前がありませんでした。

その女の子には友達がいませんでした。

その女の子は、生まれてこの方、

嬉しいと思ったことも悲しいと思ったことも、

笑ったことも泣いたことも、

楽しいと感じたことも辛く感じたこともありませんでした。

けれど、寂しい、という思いはいつも抱いていました。

その女の子は、いつもひとりぼっちでした。

ある日のこと、女の子は、小道まで出て野草を摘んでいました。

その小道は、時たまに人が通っていきます。

けれど、

斧を担いで歩いていく樵夫も、

はしゃぎながら駆けていく子供たちも、

お腹を空かせた森の獣たちでさえ、

その女の子には見向きもしませんでした。

いつも、こうでした。

女の子は、まるでそこにいないかのように、誰にも相手にしてもらえませんでした。

女の子は摘んだ野草を握りしめ、とぼとぼと家路につきました。

悲しい、という思いはありませんでした。

女の子の胸を占めるのは、寂しい、という思いだけでした。

次の日も、女の子は小道に出て野草を摘もうとしました。

しかし、何故か野草たちはみんな枯れてしまっていました。

昨日が寒かったせいでしょうか。

仕方がないので、女の子は今日には家に戻ることにしました。

……と。

背を向けた小道に、人の気配がしました。

女の子が振り返ると、ちょうど、誰かが向こうから歩いてくるとい

ろでした。

歩いてきたその人は、綺麗な目をした、男の子でした。

男の子の服は、ぼろぼろで、何日も洗っていないかのように汚れていました。

この人もどうせ、自分には気付かないだろう。

と、女の子は物淋しい気分で、歩いてくる男の子を見つめていました。

ところが。

「きみは、ここで何してるの？」

その男の子が、女の子に向かって話しかけてきました。

女の子は驚いて、思わず振り返りました。

自分の後ろにいる人に話しかけているのかと思ったからです。

けれど女の子の後ろには誰もいません。

それどころか、

「後ろに誰がいるの？」

と、さらに男の子が訊ねてきました。

「君は……」

女の子は言葉に詰まりました。

誰かに話しかけられたのは、初めてでした。

誰かと話すのも、初めてでした。

女の子が黙って俯いてしまうと、男の子は困ったように笑って言いました。

「あの、初対面にいきなりで、悪いんだけど」

女の子は顔を上げました。

「君の家に、何か食べるものってある？ よかったら、少し分けてくれないかな」

「……お腹、空いてるの？」

女の子が聞き返すと、男の子は、申し訳なさそうな笑顔のままに言いました。

「うん、すっごく」

女の子は、男の子を自分の家に案内しました。

昨日摘んだ野草と、残っていた食材で、簡単な料理を作っ
てあげると、男の子は無我夢中になって食べました。

途中、男の子は手を止めると、

「きみのお父さんとお母さんは、どこか働きに行ってるの？」

と、聞いてきました。

女の子は、首を横に振りました。

「いつからいないのか、憶えてもないよ」

そう言うと、男の子は分かりやすく驚いた顔をして、

次に、少し顔を曇らせて、

「いめんね」

と、謝りました。

女の子は、どうして謝られたのか、よく分かりませんでした。

「でも、それなら僕と一緒にだね」

男の子は言いました。

「一緒？」

「うん、僕もこの前、火事で家族がみんな死んじゃったんだ」

以来、行くあても無くて、ひたすら歩き回って、食べるものを恵んでもらっていたんだそうです。

女の子はそれを聞いて、初めて、可哀想だと思いました。

「ここに住む？」

女の子が告げると、男の子は、さっきの何倍も驚いた顔をしました。

「いいの？」

「うん、わたしもずっと一人で、寂しかったから」

「ありがとう！」

男の子は、それは嬉しそうな笑顔で、そう言いました。

女の子も、つられて笑顔になっていました。

その日、女の子は、初めて笑いました。

男の子と一緒に過ごして始めて、何日か経ちました。

女の子は、

野草の種類や、

森に住む獣たちのことを、

男の子に教えました。

男の子は、

町の様子や、

そこで人々はどのように暮らしているのかを、

女の子に話して聞かせました。

「面白そうだね」

「面白かったよ。友達もたくさんいて」

男の子は懐かしそうに言いました。

「寂しくない？」

女の子が聞くと、男の子は、笑って答えました。

「寂しくないよ。友達は、今もいるし」

その「友達」が、自分のことを指しているんだと気付くのに、女の子はしばらくかかりました。

「今度、一緒に町に行こうよ」

「うん」

生まれて初めて。

誰かと過ごした日々は、女の子にとって、初めて楽しいと思える日々でした。

夜。

女の子は、何かの激しい息づかいで、目が覚めました。

不審に思って、体を起こし、部屋の中を見回してみました。

男の子でした。

部屋の向こうの、簡易寝台で寝ている男の子。

男の子は、ぐっしょりと滝のような汗をかいて、苦しげに浅い呼吸を繰り返していました。

女の子は、男の子の額に手を触れ、すぐにその手を引きました。

熱い。

真昼の海辺の砂のような、とんでもない熱さでした。

「……………熱病？」

女の子は、慌てて、再び部屋を見回しました。

こんな時、どうすればいいのか。

女の子には、全く分かりませんでした。

とりあえず、近くの川へ行つて、布に冷たい水を含ませて持ち帰ると、男の子の額に乗せてみました。

けれど、一向に男の子の様子は良くなりません。

それどころか、男の子は、さらに苦しそつに、悪化したように見えました。

どうしたら、いいのか。

何か無いのか。

女の子は、部屋中を探して回りました。

ただ、何を見つければいいのか、それも分かりませんでした。

そうして、焦って開け放った棚の、中。

今まで無かったはずのものが、ありました。

鎌。

持ち手の部分は、白骨のように白く輝き、

刃の部分は、ぬらりと鈍い銀色に光っていました。

女の子は、それを見て、何故だか少しだけ、気分が落ち着きました。

でも、こんなものに見覚えはありません。

こんな物騒なものに、いて欲しくありません。

捨て去ってしまおうと、女の子は、手を伸ばしました。

触れた、刹那。

まるで、水風船を破裂させたかのように、女の子の頭の中を、一時にいろいろなもの、駆け巡っていきました。

この鎌が、ここにある、意味も。

男の子が、熱病にかかっている、意味も。

そして、女の子の、本当の正体も。

女の子は、鎌を握ったまま、ゆっくりと振り向きました。

視線の先には、熱にうなされて、ひどく苦しげな呼吸を繰り返す、男の子。

女の子は、鎌の柄を、指でゆっくりと撫でました。

まるで、ずっと使ってきた道具のように、その鎌は、女の子の手に馴染んでいました。

彼女は、死神。

人の魂を、煉獄へ連れていくのが仕事。

死神だから、女の子は、普通の人たちや獣には見えませんでした。

死神だから、女の子が触れた、摘まれる前の命ある野草たちは、次の日には枯れました。

死神だから、もうじき一生を終える運命の、この男の子には、女の子の姿が見えました。

女の子は、そっと、立ち上がりました。

ここで、男の子の命を絶ち、その魂を奪うことが、女の子の仕事でした。

あと数歩、前に進んで。

この鎌を、振り上げて、下ろす。

たったそれだけで。

たったそれだけのことで、女の子の任務は、終わりでした。

けれど、
けれど。

そんなことが、女の子に、できるはずがありませんでした。

女の子にとって、男の子は、初めて話した相手でした。

男の子は、初めてできた、唯一の友達でした。

その、友達の、命を奪うなんて。

女の子は、そっと手を下ろしました。

その時、女の子は、死神の世界に背を向けました。

鎌が床に落ちて、重く響く音を立てました。

ここにいても、きっとそのうち、男の子は死んでしまう。

女の子は、町へ行くことにしました。

薬屋にでも潜り込んで、熱に効く薬を、もらってこようと考えました。

それを使えば、男の子は、無事に助かるだろうと考えました。

そうして元気になれば、男の子にはもう、女の子の姿は見えなくなるでしょう。

けれども、女の子には、迷うことなどありませんでした。

男の子と話せなくなる。

そのことが、辛くない、悲しくなんかない、と言えば、嘘でした。

考えるだけで、泣き出したくなるような気分でした。

けれど、それでもやっぱり、女の子には迷うことなどありませんでした。

これからも、傍にいたことはできます。

早く町へ急ぎたいという心情と、ここにいたことが耐えられないという心情がぶつかって、女の子は、小屋を飛び出しました。

泣きながら、町への小道を走っていく女の子の背を、青白い月の光が照らしていました。

初めて友人からこの話を聞いた時、私は到底信じられる心持ちでは無かった。

この国には確かに様々な「不思議な話」が存在する。

だがしかし、死神と共に過ごした人間などいるのだろうか。

そもそも死神なんてものが実在するのだろうか。

私の怪訝極まりない表情を見て、その友人は面白そうに言ったものだ。

「話をすると、みんなその顔をするんだ。証拠を見せてやるよ」

彼は言い、部屋の一角にある棚まで私を導いた。

彼がその棚の戸を開けると、中には、奇妙な形の鎌が入っていた。

持ち手は白骨のように輝く白色で、その刃も全く錆びることなく光っている。

確かに何故か、この世で作られたものとは違うような、僅かに異質な雰囲気を纏った品だった。

そして、唐突に、コトリと鎌が浮き上がった。

彼曰く、死神の彼女が持ち上げている……らしい。

「どうも僕は一度死にかけたせいで、彼女の姿が薄く見えるんだ。いやあの夜は本当に苦しかったけど、そのお陰で少しでも彼女が見えるようになったというのは、怪我の功名ってやつだと思っただよ
ね」

彼の言葉に呼応するように、鎌が軽く震えて、元の位置に戻った。

(後書き)

えーと……童話じゃなくなっちゃいました。

まあ、何にせよ最後まで目を通してくださってありがとうございます。
す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1710k/>

Nobody do see girl

2011年10月6日00時17分発行